

僕は食へないのでお碗に湯丈のんで、箱も箸も格子の外へほらうかり棄てる。

頭にコブが澤山出来てゐる。

オラビ續ける。

聲が出なくなる。

退儀でバラ／＼に自分の肉がなりそうだ、かと思ふと金剛石の如き骨がキシメク。

存在は凡て滑稽なヌルミを周りに持つものだ。

僕の脈管の中では、赤血球と白血球とが戦争して、バリーダが漁夫の利を占めつゝある。

たまらないのは獨り神様ばかりではない。

他の自我を幾個でも搔き寄せて、一つの現像液に浸した場合、其の自我は同じ苦しみを持つだらう。

講演會は今夜だ。僕は留置場の中に居ても、聴衆は耳を揃えて傾けてゐる。

立ち上つて、格子を踏ん張つて、兩方の手を握り固めて、僕は彼等に聞えるように叫ばなければならぬ。